

飯島裕子／ビッグイシュー基金著『ルポ 若者ホームレス』ちくま新書（2011年）

大都会の駅頭において「ビッグイシュー」を販売するホームレスの人たちを目にする機会は少ない。日本において、その販売を担っているビッグイシュー日本事務所が売り子希望者の異変に気づいたのは、2008年9月のリーマンショックより以前の2007年4月頃からという。希望者に若者が増え、低年齢化が進んだのである。若年ホームレスの増大は、これからの彼／彼女達の長い生涯に思いを馳せると、暗澹とせざるを得ない事態といえる。さらに、問題なのは、若い販売者が「1週間と続かない、安い宿があるのにドヤに行きたがらない、ホームレスになった自覚が乏しく、危機感が感じられない」といった従来の中高年ホームレスと異なる行動特性を有していることにある。これらの特性は、「ビッグイシュー」販売による収入を元手に、節約生活を通して自立に向けた生活資金を獲得するといったホームレスの自立へのツールが、従来ほどには有効に働かないことを意味している。

このような問題発生に対して、ホームレスの人たちの自立を支え、再び社会に戻ることをサポートするビッグイシュー基金と著者は、2008年から2010年にかけて、東京と大阪で、「ビッグイシュー」の販売員や炊き出しにきていた若年男性50名を対象に聞き取り調査を行った。

本書は、それぞれに3時間程度をかけて行われた聞き取り結果を、第一章「若者ホームレスの現実」、第二章「若者ホームレスと家族」、第三章「若者ホームレスと仕事」、第四章「ホームレス脱出」として再構成したものである。

本書の読後感は、一言でいえば、“重い”。それは、職や家を失った彼らが不安で過酷な“弱肉強食”の状況に日々晒されていることにある。さらに、彼らの生育歴やホームレスに至るプロセスを辿ることによって、ホームレスという生活状況が、近年始まったのではない“貧困”の世代間連鎖の要素が強いこと、正社員として働いていた若者が転職を繰り返すことで失職・ホームレスに急速に滑落すること、彼らを取り巻く家族を含めた人間関係が容易に“無縁な”状況に陥りやすいこと、などを知ることになるからである。

さらに、読後感を一層“重く”するのは、ホームレス脱出の即効薬や特効薬が見出しにくいことが、浮き彫りとされていることだろう。ビッグイシュー基金は、『若年ホームレス白書 - 当事者の証言から見えてきた問題と解決のための支援方策 -』（主査：宮本みち子放送大学教授）を公表し、「若者をホームレスにしないために - 今、必要な支援施策」として、今後の施策立案に当たってはこころの健康を含めた総合的な施策が必要なことを提言している。

ところで、「聞き取り調査」は、何よりも被調査者と調査者との信頼関係により成り立っている。若者ホームレスという調査テーマは、深刻な生活困難に陥っている若者に対して、その日常生活とその背景を、その生活歴にまで遡るなどプライバシーに深く関わるものであるだけに、両者の関係がより重要となる。さらに、その若者が、「ホームレス」とは一線を画し、自らは異なる世界の住人であることを頑なに守る生活態度を大切にしているのであれば、調査のバリアはより高く、厚いことが推測され、彼らの証言から得られた「事実発見」の見極めは、調査者の見識と調査力量を要するものと思われる。それらの点を勘案すると、「証言集」はより一層貴重なものといえる。

このような「重い」テーマと対象に取り組む研究者の熱意に敬意を払うとともに、一層の活躍を期待したい。（井出 久章）